

傲慢は自滅し謙虚が道を開く：恥ずべき科学者共同体

Greatchain

2019/07/18

有名な数学者で『悪魔の惑わし：無神論と科学者の思い上がり』 *The Devil's Delusion: Atheism and the Scientific Pretensions* の著者 David Berlinski が、「科学の反乱」運動の有力な一人として講演しているが、彼はそこでこう言っている——「科学者共同体は恥ずべき団体だ。もし民衆の後押しがなければ、ダーウィン進化論などはとっくの昔になくなっていくはずだ。」そして民衆の後押しも、教科書やメディアを見ればわかるように、工作されたものである。

わが国で、「無神論と科学の思い上がり」が生まれ育った経緯には、西洋とは違った別の事情がある。何よりも、明治維新の廃仏毀釈運動でわかるように、キリスト教のような自信のある宗教はわが国になく、ダーウィン進化論の導入に抵抗を感じずる人々は、ごく少数だったと思われる。そして、おそらく今でも、この科学の危機の運動に気づいている人々は、日本ではわずかであろう。(因みに、ノーベル賞の数などは全く関係がない。)

大正ころの小さな事件で、「念写」を研究しようとして東大を追放された、福来友吉という人がいた。科学の対象は唯物論的な実在であり、科学者はそんなものを研究してはならなかった。これは今でも変わっていない。現実には念の力も、人間の感情に反応する水のようなものも存在し、その重要性が今わかってきたにもかかわらず、そんなものは存在しないことになっている。(そもそも、水の驚異的な性質を、子供に教えているという話を聞いたことがない。Cf. *The Wonder of Water* <https://discoveryinstitutepress.com/book/the-wonder-of-water/>)

更に、半世紀くらい前だろうか、日本の留学生が外国で、「あなたの宗教は何ですか」と聞かれ、彼はむっとして「私は無神論者です (馬鹿にするな)」と答えたという話を聞いたことがある。これも日本人特有の話で、今でもこの通りの思想が、学界やメディアを支配し、科学的無神論が彼らのプライドの根源になっている。これは確かに欧米でもそうだが、わが国には、この病に気づきにくい条件がある。ほとんどあらゆる人々が、科学、すなわち科学的唯物論に、重要な問題があるとは思っていないであろう。これは私自身も、つい数十年前まで (特に ID を知るまでは) 同じで、学問は理系文系を問わず、無神論でなければならな

いと、漠然と考えていた。ではなぜ、ベアリンスキーのようなひどいことを、いま言われねばならないのか？ 悪魔の惑わし？ 無神論と科学者の思い上がり？ 恥ずべき科学者共同体？——これは彼だけの特別な考えではない。この啓蒙運動に集まった人々のほぼ共通の見解である。唯物論科学自体が、唯物論科学の信用をなくさせる原因を作っている、というべきだろう。

今ここに、このベアリンスキーの言葉をそのままに、現実の実験室の中から大声で叫ぶ人がいる。それは James Tour という化学者で、タイトルは「生命起源の神秘」だが、編集者によるタイトルは、「化学者ジェイムズ・トゥアは辛辣かつ痛快だ：“Abiogenesis の化学過程を見せてくれ、そんなものはどこにもない”」となっている。これは専門家でないとうわかない言葉がいっぱい出てくるが、趣旨は明瞭単純で、科学者集団は、無生物の化学構成を続けているうちに、生命が生まれると言っているが、そんなことは絶対にない、と彼は断言している。経験を重ねたうえの、非常に詳しい論証なので、もしここに専門家がおられたら、よく調べ、反論があるなら彼にそう言っていただきたい。彼は神ともインテリジェンスとも言っていない。ただ科学者共同体がウソをついていると言っているのである。

<https://evolutionnews.org/2019/04/chemist-james-tour-is-scathing-hilarious-show-me-the-chemistry-of-abiogenesis-its-not-there/>

この abiogenesis の a は without の意味で「生命なしの生命起源」という意味である。（読んでみると、これが不定冠詞のように離れているが、くっつけて読まねばならない。）これはダーウィン体制では、ウソをついてでも、存在することにしなければならないことになっている。10年ほど前のことだが、私が高校の生物教科書を調べていたとき、「無生物的に（生命が発生する）」と、いかにも事もなげに書いてあるので、ハッとしたことがある。この表現はおそらく abiotically の訳で、これは、故意にこんなわかりにくい言葉を作ったとしか考えられず、青少年をひそかに洗脳する意図がうかがえる。

これを読んで、「そんな細かいことはどうでもよいではないか」という批判をする人があるかもしれない。確かに細かいことかもしれない。しかしこの背後には、非常に大きな、おそらく大きすぎて見えなくなるような問題が隠れている。それはこの宇宙から神を追い出し、それを人間の手に奪う計画である。この強い意志を、リチャード・ドーキンズは——この自然界があまりにも見事にデザインされている事実について——こう述べた、「これは自然選択だからできることであって、神にそんな能力はない。」これ以上の、滑稽と傲慢と敵意はあり得ない。ダーウィン進化論は「科学的に正しい」のではなく、「政治的に正しい」politically correctなのだということはすでに述べた。

人は、傲慢とか謙虚といった、人間の基本的な道徳的資質が、科学に関係してくるとは全く考えなかったかもしれない。今、その情景が全く変わって見えるようになった。これがこの時代の特別大きな特徴である。科学が失墜したのではない。唯物論科学が敗退せざるをえなくなったのである。それに代わって有神論科学が、正しい方向付けを獲得することによって、その勢いをつけると思われる。これも、この「科学革命（反乱）」に参加する人々の共通の認識である。科学は道徳と一つになり、人間どう生きるべきかの問題と一つになって、初めて科学であろう。もし科学があくまで無神論に固執するなら、その未来にはAI（人工知能）のみが発達するだろう。しかし、人間の生きるべき方向を明確にできないAIが、どのような意味を持つだろうか？

[付記] もし我々が、これまでの生きる上での前提をすっかり転換するなら、そのことによって——神の奇跡などでなく、傲慢を捨てて謙虚に、我々の生みの親である宇宙に調和的に生きることによって——今までに見えなかった、まったく新しいものが、次々に現れるのではないだろうか？ 私はこれをたった今、Mystery of Water—What we know is a drop（水の神秘：我々の知っていることはほんの一滴にすぎない）というビデオを見ていて考えた。

<https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKEwiQ4JjgmMXjAhUBc3AKHSafDoMQyCkwAHoECAkQBA&url=https%3A%2F%2Fwww.youtube.com%2Fwatch%3Fv%3DKN3PBFxV3Xw&usg=AOvVaw0zIOW0su39Lq8NxJBpa9AG>